

書家としての呉禱

沢本香子

呉禱といえは、清末翻訳研究史では必ずといっていいくらい言及される有名人だ。翻訳作品そのものは、多くある。しかし、彼の経歴は、ほとんどわかっていない。どこまで明らかになっているのか。まず、これを説明することからはじめる。

現在までの研究

呉禱は、清末翻訳家のひとりである*1。阿英は、『晚清小説史』（上海・商務印書館1937.5）において、呉禱の名前と彼の翻訳作品いくつかをあげた。日本の作品を漢訳したことは、原著者である黒岩涙香、尾崎紅葉、押川春郎^{ママ} [浪]らの名前を見ればわかる。そのほか、翻訳の原作はドイツ、アメリカ、ロシア、フランスなど各国におよぶ。

後年、呉禱はロシア文学のいくつかを中国にはじめて紹介した、と強調したのがこれも阿英だった。ゴーリキー、レーンモントフらの小説である*2。それ以来、研究者が呉禱に言及するばあい、彼の仕事としてロシア小説の翻訳をまずあげることになった。翻訳辞典、文学史などを見ればそう説明されていることがわかるだろう*3。記述がかたよるその原因は、阿英の文章にあるといわなければならない。

呉禱の翻訳には、ひとつの特徴がある。日本人作家の作品は当然にしても、ロシア小説を含めた彼の漢訳多数が、日本語翻訳にもとづいた重訳なのだ。これも周知の事実だといえる。

呉禱は日本語ができた。日本に留学した経験があるのではないかと普通は思う。推測どころか、呉禱の日本留学を断言する研究者もいる。

たとえば、任栄珍、郭延礼、查明建らである（注3にあげておいた）。最近の研究

では、呉笛ら『浙江翻訳文学史』（杭州出版社2008.1）も同じように説明する。

該書30頁にはつぎのように書いてある（呉笛執筆）。参考までに引用しよう。

呉櫛（1880?-1925）、字は丹初、号は亶中、浙江錢塘（今の杭州）の人。かつて日本に留学したことがあり日本語に精通し、また歴史の教員でもあった。彼の主要な翻訳活動は清末民初に日本語を通じて小説を翻訳したことだ。ロシアなどそのほかの国の文学作品であれ、彼はほとんど日本語から転訳した。

呉櫛の経歴を紹介してほぼ以上の内容になる。これが現在までくり返されている研究の状況だ。

こまかいところから指摘する。呉笛は、呉櫛の生没年に関して資料を示さない。没年を1925年とするのは、陳玉堂の名号大辞典に「?-1925在世」とあるのによったものか。疑問符がついている生年の「1880?」は、どこから来たのか。説明はない。

「かつて日本に留学したことがあり」と呉笛は断定する。先行論文を参照したのだろう。しかし、呉櫛の日本留学を裏付ける資料は、残念ながら今のところ提出されてはいない。

上の引用にある「また歴史の教員でもあった」についても具体的な記述がない。これは、愛国学社の教員という意味だろう。字の「丹初」とかわりがある。この丹初が呉櫛の別名であることが指摘されてから展開していった。そのいきさつを簡単にのべておく。本稿の趣旨に関連すると考えるからだ。

ひとつは、新聞記事である。

1907年『同文滬報』の記事「新刊小説」が、商務印書館の刊行した翻訳小説数種に言及している（詳しくは樽本論文を参照のこと）。そこに「錢塘呉丹初訳」と表示されている箇所が新しい資料だった。そこに見る翻訳小説の書名は、呉櫛の作品としてすでに知られている。つまり、翻訳小説を媒介にして、呉櫛と呉丹初が結びついた。

もうひとつは、『張元濟日記』（北京商務印書館1981.9）に証拠がある。

1912年と1913年に、商務印書館の張元濟にむかって翻訳についての相談をもちかけた人物がいた。呉丹初だ。

張元濟はその日記に「呉櫛」とは書いていない。しかし、そこにあげられた作品

が、これも呉禱の翻訳だ。すなわち、呉丹初が呉禱と同一人物である根拠になる。確かな証拠があって、呉禱の別名に丹初があることが判明した。

呉丹初という名前を手がかりにすると、それまで存在していたいくつかの別資料にその名前が見つかる。点在していた呉丹初が、呉禱という人物に重なり、あらためて注目されるという流れになる。ことばをかえていえば、愛国学社教員のなかに呉丹初がいたことは知られていた。だが、それが翻訳家の呉禱であるとは、以前はかならずしも認識されていなかったということだ。

愛国学社に関しては、蔣維喬によるふたつの証言がある。

第1は、蔣維喬「編輯小学教科書之回憶」(『出版周刊』新156号1935.11.23)という。呉丹初が出てくる箇所を引用する。

蔡元培は愛国学社の社長だったが、いつもいるわけではなかった。また、商務印書館編訳所は規模がとても小さく、教科書を編集する話があったけれども、専任の人間を招聘するわけではなく、やはり請負の方法を採用した。蔡元培がまず国文、歴史、地理3種の教科書の編纂方針を定め、愛国学社の国文、歴史、地理の教員にまかせた。蔣維喬は国文を、呉丹初は歴史、地理を担当し、当時の代価は2課分で1元の報酬だった。9-10頁

この時の教科書は、結局のところ完成しなかった。張樹年主編『張元濟年譜』(北京・商務印書館1991.12。42頁)は、教科書編集計画を1902年2月の項目に収録する。この1902年というのが微妙な時期なのだ。

第2は、蔣維喬「中国教育会之回憶」(『東方雜誌』第33卷第1号1936.1.1。9頁/上海通社編『上海研究資料続集』上海・中華書局有限公司1939.8)である。同一人物の文章だからよく似た内容だ。しかし、異なる箇所もあるので引用しておきたい。

愛国学社の指導者、学監から教職員まで、みなが別に生計を立てていて、学社については純粋に義務を果すだけだった。たとえば蔡子民(元培)は商務印書館編訳所所長だし、呉稚暉は文明書局につとめていた。34年の国文教員は章太炎(炳麟)で、12年の国文教員は私(蔣維喬)だったが、章は人のために『妖怪学講義』を翻訳し、私は蘇報館で日本の新聞を翻訳しながら、その翻訳料で自給していた。歴史地理教員の呉丹初もまたそうであった[歴史地理教

員吳丹初亦然]。87頁

愛国学社の教員は、無給だったことがわかる。各人が生活するためには、仕事を別に持つ必要があった。この箇所注目する。蔣維喬があげた別の仕事というのが、翻訳である。

『妖怪学講義』という書名がでている。実藤文庫目録によると、井上圓了著、蔡元培訳『妖怪学講義録』（上海・商務印書館 光緒32刊（民国7印））がある。表示を見ると1906年の出版物だ。章太炎が人のために翻訳したというその「人」とは、蔡元培だったことになる。出版社が商務印書館だから説明は符合する。

「吳丹初もまたそうであった」という文章が意味するのは、なにか。文章の流れからいえば、このばあい吳も翻訳をして生活していたと考えていいだろう。蔣維喬は、吳丹初に関してそれ以外のことをまったく書いていない。

吳禱の翻訳は、掲載された雑誌を見れば多くが商務印書館の刊行物だ。吳丹初すなわち吳禱の翻訳がはじめて雑誌『繡像小説』に出現するのは、1905年だった。先に、1902年が微妙な時期だと私が書いたのは、この時間的な差異である。1905年に発表される翻訳作品があるにしても、それより前の1902年に該当の原稿料が支払われるだろうか、という疑問が生じるのだ。もっとも、章太炎の例を見れば、実際に出版される前にいくらかの翻訳料が出ていたと推測することはできる。また、1905年の『繡像小説』以前に別の翻訳を出版していれば、蔣維喬の説明も吳禱に適用できるだろう（後述）。

吳禱訳の単行本は、同じく商務印書館から出版されたものが圧倒的に多数を占める。その事実を見れば、吳禱が商務印書館に勤務していたとする陳玉堂の記述に納得しそうになる。ただし、こちらも詳細は不明だ。なによりも資料的な裏付けが今のところ、ない。

吳丹初名を手がかりにして高平叔『蔡元培年譜長編』上冊（北京・人民教育出版社 1996.3）からいくつかを抜き出す。以下ですべてだという意味ではない。

1902年11月26日、愛国学社の開校式で祝辞をのべた（249頁）

1903年4月26日、中国教育会が徐園で成立1周年大会を開催したおり、評議員11名のひとりに選出された（262頁）

1905年1月15日、中国教育会代表として吳丹初の名前が見える（292頁）

1905年6月25日、中国教育会書記に推薦され決定する(301頁)

上の活動歴から考えると、呉丹初は1902年から1905年にかけては教育関係の仕事をしていた。仮に呉禱が日本に留学したことがあるとして、時間的に可能だと考えられるのは1904年頃だろうか。しかし、くり返すほかないが、留学の確証はみつかっていない。

呉禱の翻訳作品は、確かに存在する。しかし、彼の経歴については、以上にのべたとおり詳細がいまだに不明のまま。呉丹初という別名が明らかになっているところまでが、従来の研究の到達点だということができる。

呉禱経歴についての新展開

呉禱は、当時、書家としても知られていた。そう教えて下さったのは、アメリカのX教授である。

清末翻訳小説研究の分野では、呉禱が書家であったと述べる文章はなかった。研究文献を見る限り(私の目の及ぶ範囲は狭いにしても)、書家としての呉禱を紹介するものはない。分野が異なるとはいえ、今までの追究が不十分だったということになる。

念のために、王中秀、茅子良、陳輝編著『近現代金石書画家潤例』(上海画報出版社2004.7/2005.9第2次印刷^{*4}。以下『潤例』と称す)を見る。

書名に見える「潤例」は、また「潤格」ともいう。書画の揮毫料金表である。客の注文に応じて揮毫するというのだ。その種類、大きさなどについて料金が細かく定めてある。

何にも値段はあるものだ。中国では揮毫料金表を新聞雑誌などに掲載して公開する習慣があった。新聞に掲載しないまでも刷り物にして配布してもいい。実例を収録する専門書が出版されているところを見ると、芸術作品について値段をあからさまにするのは、中国では不思議でもなく普通のことだったとわかる。料金表を公開するのは、露骨に書けば生活のためだ。そればかりではなく、依頼を断わる口実にすることもあったといわれる^{*5}。また、災害に見まわれた時の義捐金を広く集める目的でも活用されている。

該書は、その時代に活躍していた現役書画家の作品料金表をまとめた資料集だ。新聞雑誌などから記録を丹念に収集しているのが注目される。日本では容易に見る

こののできない種類の記録であったりする。それだけでも珍しい。さらには、資料を総合して人物の略歴を示すなど、十分な配慮がほどこされている。有用な研究書であり資料集だといってよろしい。

開いてみれば、専門書はやはりちがう。呉禱について関連記事を細かく採録している。私は感心した。

呉禱について知るには、該書所収「附録五 人物略歴」に書かれた簡潔な説明を引用して翻訳するほうが早い。本稿では、とりあえず「呉禱略歴」と称する。

呉禱 76,88,103,165 (筆者注：該書の頁数。潤例が掲げてあるページを示す)

(? - ?) 字は亶中、室名は天涯芳草館。よって別に天涯芳草館主と署名する。清末の比較的早くにロシアの名著を紹介した作者であり、訳著はおびたしい。また、書画金石にすぐれ、特に書作で著名だ。幼いころから家学を受け継ぎ、諸家を融合し別に一家を立てた。1900年、参画して書画公会報を組織した。

423頁

生没年を不明にしているのが、かえって記述の信頼性を増している。推測と事実を区別しているとわかるからだ。呉丹初名は、あげられていない。そうすると潤例広告には使用されていない可能性がある。書画公会報は、原文のままだ。書画公会を組織し、機関紙として『書画公会報』を刊行したという意味だろう。

亶中という呉の字は、清末翻訳小説の研究分野ではすでに知られている。呉禱亶中という表示で普通に見ることができる。

上の引用文で注目されるのは、室名が天涯芳草館だという指摘なのである。私の知るかぎり、今まで出版されているいくつかの筆名録に天涯芳草館、また天涯芳草館主は、収録されていない。しかも、それが呉禱の室名だという。注目せざるをえない。

書家としての呉禱は、私にはなじみがなかった。まったく違った方向と関係がもとからあったらしい。思いもしなかった事実を、突然目の前に突きつけられたような気がする。

「呉禱略歴」は、ロシア文学の翻訳者だという。だから、なじみのあの呉禱に間違いはない。その彼が、書家であって天涯芳草館主と名のついていたというのだ。このまま信用していいのか。不安を感じないわけではない。外国文学の翻訳家とは違

う、つまり同姓同名の別人ではなかろうか。いや、ロシア小説の翻訳に言及しているからには、この呉禱は、翻訳家で著名なあの呉禱に違いなさそうだ。まわって、またそこにもどってくる。呉禱は書家でも有名だったのか。そればかりか、書画公会を設立した人物ということは、ある意味で斯界の実力者であることを示している。

「呉禱略歴」に見えるこの書画公会から探索をはじめることにした。

書画公会

書家について、私は何も知らない。手元にある李叔同（弘一大師また法師）研究の書籍数冊を見る*6。それらから関連する文章を書き抜きながら探ることにしよう。いくつかを以下に示す。さきに言ってしまうと、その記述は大同小異である。皆がもとづく特定の文献があることを示唆する。

朱経畚「李叔同（弘一法師）年譜」天津市政協文史資料研究委員会、天津市宗
教志編纂委員会『李叔同 弘一法師』天津古籍出版社1988.4。7頁

1900年（庚子 光緒二十六年） 二十一歳

3月、常熟烏目山僧^マ黄^マ仰宗、上海名画家任伯年、書家高邕之らと「上海書画公会」を福州路楊柳楼台旧址に設立する。書画報を毎週出版し中外日報社の新聞に添えて発行した。

史和、姚福申、葉翠娣編『中国近代報刊名録』福州・福建人民出版社1991.2。
103頁

『書画公会報』

1900年3月、李叔同は、常熟烏^マ[烏]目山僧（黄宗仰）、上海名画家任伯年、書道家高邕之らと上海書画公会を組織し該報を創刊した。毎週、書画紙を出版する。

秦啓明「李叔同生平活動系年」秦啓明編注『弘一大師李叔同書信集』西安・陝
西人民出版社1991.7。410頁

1900年 二十一歳

3月 黄^マ仰宗（烏目山僧）、湯伯遲、任^マ柏年、朱夢廬、高邕之らの書画名家と袁希濂がおこした「上海書画公会」に加入する。毎週書画報を編集し『中外日

報』に添えて発行する。

林子青編著『弘一法師年譜』北京・宗教文化出版社1995.8。17-18頁

一九〇〇年（光緒二十六年庚子）二十一歳

……三月、上海の書画名家たちと上海書画公会を組織し、毎週『書画公会報』を出す。（後略）

袁希濂「余と大師之關係」：「庚子三月、上海福州路楊柳樓台旧址において海上書画公会を組織した。同人が茶を賞味し絵を鑑賞する場所である。毎週『書画報』を出す。常熟烏目山僧宗仰上人および徳清湯伯遲、上海名画家任伯年、朱夢廬、画家高邕之らがともに入会した」

【按】『書画公会報』は光緒二十六年（一九〇〇）四月に創刊され、週2回（水曜日、日曜日）発行。第1、2期は『中外日報』に添えて共に配付された。第3期から自主的に発行発売。第2期は四月二十五日水曜日に発行した。第3期は四月二十九日日曜日発行（注：二十九日は土曜日）。（後略）

もちろんこれで全部ではない。だが、ほかも記述はほぼ同一だから取捨選択した。見てもらえばわかる。林子青の文章が、注を含んで比較的詳しい。調べてみればほかの書籍がよった種本は、この林子青編著『弘一法師年譜』そのものだった。初版は、上海・中日文化協会上海分会1944.9（未見）という。

以上の記述によれば、共通する箇所とそうでない部分にわかれる。

ほぼ共通するのは以下のことだ。1900年三月に書画公会が設立され、その機関紙『書画公会報』が刊行された。会の設置場所と会報が毎週発行されたことなどは、一致する。『書画公会報』は、最初『中外日報』に添えて、つまり中国でいう「副刊」扱いであった。

李叔同は、会の創設者のひとりなのか、あるいは後に加入したただの会員なのか。そこは、文献によって記述が異なる。

「上海」も「海上」も同じ意味だ。設立者が袁希濂だとすれば、彼が書いている「海上書画公会」が正式な名称か。または、「海上」は正式名称には含まれない可能性もある。

細かいことをいう。気になるのだからしかたがない。会が設立されたという「3月」は新暦で「三月」は旧暦のように見える。だが、中国では「1900年3月」と

書いて新暦旧暦を混用する例が多い。この「3月」は旧暦だろう。

私は、不思議に思う。これらの文章を見ても呉禱の名前はどこにもないからだ。前出『潤例』の「呉禱略歴」は、書画公会の設立に参画したと説明しているではないか。

比較的最近の研究であり、しかも資料を博搜することで定評のある郭長海の著作を紹介する。

郭長海の説明

郭長海、郭君兮編『李叔同集』（天津人民出版社2006.6）がある。該書は、李叔同が出家する1918年までを対象とする。だから弘一大師を書名に使用していない。

書画公会に関係する部分は、該書の2カ所に見ることができる。ひとつは、李叔同の経歴をのべる「前言」だ。もうひとつは「附録 李叔同事迹系年（1880-1918）」になる。

まず、「前言」からはじめる。

ここでつまずく。郭の記述をたどると、書画公会が結成されたのは1901年になってしまう。上に見てきた1900年ではない。一年の相違がある。郭長海の説明によると、こうだ。

1900年夏、北方では義和団事件がおこる。8月、八国連合軍が入って北京天津は大いに混乱した。上海にいた李叔同は北上して親戚を訪問したかったが実現することができない。そこで1901年元宵節の後に北上する。李は天津で半月歩き回りすぐに南下した（4-5頁の大要）。そこから以下の説明に続く（西暦年を補う）。

上海にもどったが、北方の戦乱の関係によって庚子〔1900〕年の各省郷試はすでに実施できなくなっていた。次回の郷試は癸卯〔1903〕年であり、まだ二年もあるし戦乱が終結するかどうかもわからない。どのみちこの二年はヒマでやることもないし、城南文社ではしばらく勉強会を中止していた。5頁

郭は、李叔同が1901年元宵節の後に北上してすぐにもどってきた、と述べる。そうならば、上の説明は1901年の出来事にちがいない。

「城南文社」は、郭長海が該文の前部分で「城南草堂」と書いているものだろう。場所が「草堂」でそこに集まって「文社」という意味だと理解する。許幻園、張小

楼、袁仲濂^{ママ}（別の論文では袁希濂*7とする）、蔡小香らと詩作にはげんでいた。

もういちど郭の説明を見てほしい。次に開催される郷試は1903年であり、それにはまだ二年ある、という箇所だ。1903年の二年前といえば、やはり1901年にならざるをえない。

もとより芸術的天才をもつ張小楼、許幻園、李叔同らの人々はそのまま遊んで時間を無駄に過ごす考えはなく、ある芸術団体を設立する相談をした。書と絵画のふたつの分野に重点をおき、収集、研究、整理、刊行配布して芸術を家蔵から社会に向けようとした。そうして書画公会が誕生し、その広告はつぎのように書いている。

本会は風雅を提唱し、文芸を振興することを趣旨とする。書画篆刻などを
もっぱら印刷し、そのほかのニュースは掲載せず、流弊を根絶する。入会
希望者には、本会は各種の利益をもって応じる。広告を掲載したいならば
別に規定があるので本報に載せる。会は四馬路西大新街口楊柳楼台旧址に
おく〔本会以提倡風雅、振興文藝為宗旨。專印書画篆刻各件，他項新聞概
不登載，以杜流弊。願入会者，本会即酬以各款利益。欲登告白，另有章程，
載明本報，会設四馬路西大新街口楊柳楼台旧址〕。5頁

新聞広告らしい（後述）。書画公会の設立を宣言すると同時に『書画公会報』の内容についても予告説明している。

この部分を読んで、郭長海らしくない、と私は思う。なぜならば、資料を探索して探究して確実で確証のあるものしか提示しないのが彼の研究方法である（はずだ）。しかし、彼は引用した新聞広告の掲載紙名と発行年月日のふたつとも明示していない。もし、それらを注記していれば、書画公会設立が1901年ではないことに気づいたはずだ。だからこそ私は奇妙なことだと感じる。

書画公会は、刊行物の販路を拡大するために新聞閲覧所を設けたと郭長海は記述する。そればかりか、お茶の用意までして読者をもてなした。

こういう具体的な説明ができるのは、郭長海が確かな資料を把握しているからだ。そう推測する。しかし、その典拠を明記していないのが惜しい。

『書画公会報』の刊行についても郭は詳しくのべる。

『書画公会報』は毎週2期を刊行し、水曜日と日曜日ごとの出版だった。1901年の旧曆四月二十二日に第1期を出版し、掲載されたのは多くの名家の書と絵画である。以後、毎期そういう内容で編集出版された。たとえば、名家俞曲園、陶心雲などの書、吳清卿、黄宗仰、胡鄰卿らの絵画である。時には彼ら数人の習作も添付した。四月に創刊し九月に停刊、五ヵ月あまりの発行で全部で40期余になる。中国近代絵画史上、これは評判のある芸術団体であり、伝統的絵画芸術および書道芸術を伝えて民間方面に向かわせるのに大きな力があつた。李叔同は、『書画公会報』の編集作業に参加することにより彼の絵画および書道方面についての興味を多いに増したし、彼がのちに美術雑誌を編集する基礎を築いたのだった。9月、『書画公会報』はコンテストを行なつたが成功しなかつた。そのため他人から攻撃を受け、人心はゆるみはじめた。そのうえ、李叔同はこの時すでに南洋公学の特別班の募集に応募しており、採用されたのちは学校に住んで学習しなければならなかつた。そこでみなは書画公会を解散することに賛成した。5-6頁

刊行物の内容および該団体の活動について知ることができる。かなり細かい説明だと思ふ。さすがに郭長海だけのことはある。

『書画公会報』について「1901年の旧曆四月二十二日に第1期を出版し」と書いているのは間違いない。郭長海は、書画公会の成立が1901年だと考えている。ゆえに、機関紙の創刊は1901年であると思ひ込んだ*8。

ところが、別の箇所では、それらが1900年の出来事だと説明するからややこしい。

「附録 李叔同事迹系年(1880-1918)」に目を転じる。上に見た同じ内容を1年違いで述べている。該当部分を引用し翻訳しよう。

1900年(光緒廿六年 庚子)21歳(注:数え年)

4月(三月)、四馬路楊柳楼台旧址において書画公会を創設する。張小楼が会長。「風雅を提唱し、文芸を振興すること」を趣旨とする。5月3[20]日(四月廿二日)に『書画公会報』第1期を出版。以後、毎日曜、水曜に出版する。はじめ『中外日報』にそえて配布し、のち自らが刊行した。254頁

中秋〔八月十五日〕、『書画公会報』は「花榜開催のお知らせ〔擬開花榜啓事〕」を發表し、この日を締め切りと定めていた。さらにお知らせを發表し、重陽〔九月九日〕の發表に延期した。こののち停刊する。255頁

こちらを見れば、書画公会の創設は明らかに1900年の出来事になっている。『書画公会報』の創刊も同年である。

記述に厳格であるはずの郭長海にして、同一書のなかでこのように1900年と1901年のふたつを提出した。食い違いを放置しているのだ。私にとっては意外だった。

その箇所、つまり年の表示が相違していることを除けば、興味深い説明だということができる。

李叔同らは、その刊行物『書画公会報』において「花榜」*9すなわち美女コンテストを開催しようとしていた。結果としてその企画は失敗する。郭長海は上の文章において、なにが問題であったのか具体的に説明はしていない。そうであっても、彼以外の文献は花榜についてまったく触れていないのだ。それらに比較すれば文句なく調査が深い。

以上、郭長海の文章を紹介した。読者はすでにお気づきであろう。書画公会については説明するが、呉濤がいたことにはひとことも触れてはいない。郭が把握している資料には、呉濤の名前はないのだろうか。奇妙なことだ。（追記：次の文章があることに気づいた。郭長海「李叔同和上海《書画公会報》」（吳曉峰主編『中国近代文学史証 郭長海学术文集』下冊 長春・吉林人民出版社2005.3）だ。「創設書画公会報啓」は、『中外日報』1900.4.27付に掲載された全文を引用している。『李叔同集』をまとめる際に資料を選択して間違いが生じたらしい。また、花榜開催の経過についても新聞広告を資料に使って説明している。以上、ひとことつけ加えた）

私が見つけた書画公会に関連する新聞広告は、郭長海が引用紹介した文章とよく似ている。だが、数人の人物が登場しているところが違う。

『同文滬報』の広告 「呉濤」の出現

新聞広告である。1900年5月7日付『同文滬報』に掲載された。また同月8日付『同文消閑報』、おなじく12日付に見える広告も同一内容だ。『同文消閑報』は、『同文滬報』の副刊である。本紙より判型を小さくした附録と考えればよい。

資料だから原文のままを示す。印刷不鮮明の箇所については、各版を比較対照し関係文献によって補った。また、句点をほどこす。

「創設書画公会報啓」『同文滬報』1900.5.7

本会以提倡風雅。振興文藝為宗旨。專印書画篆刻等件。他項新聞概不登載。以杜流弊。願入會者。本会即酬以各款利益。各行欲登告白。另有章程。載明本報。會設上海四馬路西大新街口楊柳樓台旧址。俟房屋裝修完美。四月初旬出報。詳細章程請至本会取閱。外埠郵資自理。主会蓉江小樓主人張楠。總經理西湖天涯芳草館主吳濤。副總理當湖惜霜仙史李成蹊。雲間城南草堂主人許鏞。本会附設閱報處一所。四月中旬起購具本埠及南北洋各埠華報不下三十種。另備清茶。每位五十文。詳細章程本会閱看。

広告の題名は「書画公会報創設のお知らせ」という。その内容は、書画公会を結成した、四月初旬には会報を出す、という予告である。

新暦5月7日は旧暦四月九日にあたる。四月初旬だと予告しているから、この広告が発表された前後には『書画公会報』創刊号が出ていてもよい。だが、実際の刊行は、少し遅れた四月二十二日(5.20)である(未見)。これも新聞広告「書画公会出版啓」(『同文消閑報』1900.5.20、23、24)の説明によれば、日曜日と水曜日に発行すると宣伝している。のちには刊行のたびに、「書画公会報目録」(『同文滬報』1900.5.29付以後、『同文消閑報』その他^{*10})と題して新聞に広告を出した。

郭長海が引用したのは、上に示した新聞広告の前半部分だった。掲載紙は異なる。だが、郭が引用した広告の字句はほぼ一致する。

郭の説明する新聞閲覧所、あるいは茶の用意とかも、広告文にもとづいていることがわかるだろう。原文を読めば、新聞閲覧は無料ではない。50文を徴集する、とある(郭長海の示す『中外日

事間又獲覽應備服心股藥爲世告欲知休咎者請行理之列有裨益焉 價宜者准

創設書畫公會報啓

本会以提倡風雅。振興文藝為宗旨。專印書画篆刻等件。他項新聞概不登載。以杜流弊。願入會者。本会即酬以各款利益。各行欲登告白。另有章程。載明本報。會設上海四馬路西大新街口楊柳樓台旧址。俟房屋裝修完美。四月初旬出報。詳細章程請至本会取閱。外埠郵資自理。主会蓉江小樓主人張楠。總經理西湖天涯芳草館主吳濤。副總理當湖惜霜仙史李成蹊。雲間城南草堂主人許鏞。本会附設閱報處一所。四月中旬起購具本埠及南北洋各埠華報不下三十種。另備清茶。每位五十文。詳細章程本会閱看。

不下一三十種另備清茶每位五十 詳細章程本會閱看

湖惜霜仙史李成蹊 雲間城南草堂主人許鏞 本會附設閱報處一所 四月中旬起購具本埠及南北洋各埠華報

匪豐良丁告白

報』1900.4.27付では1角)。

上記広告には、書画公会を構成する主要人物の名前が見える。郭は前出『李叔同集』においてそれらをすべて省略した。論述には必要がないという判断だろうか。あるいは紙幅の関係かもしれない。それにしても、惜しいことだった。

郭長海『李叔同集』(4頁)によれば、許幻園、張小樓、袁仲〔希〕濂、蔡小香、李叔同ら5人は、親しく交わり称して「天涯五友」という。それをふまえて上の広告を見ると興味深い。

会長の張楠は、張小樓を指す。副社長のひとり李成蹊は、ほかならぬ李叔同だ。確かな資料だということができる。該書は、李叔同を説明する専門書だからこそ郭長海はこの箇所を示すべきだった。もうひとりの許鑠は、許幻園だとわかる。

この新聞広告を見ると、書画公会の創設者は4人いる。「天涯五友」と称したなかの袁希濂と蔡小香の名前が見えない。袁希濂は自らが書画公会を組織したように説明していた。しかし、上の新聞広告を見ると、表面には顔を出していない。役職についていないだけで、書画公会の会員だと考えておく。

残るひとりの人物に私は注目する。社長の「西湖天涯芳草館主吳濤」である。ここだけ見れば突然に出現したような印象をうける。

『潤例』の「吳櫛略歴」を読んだあとだ。天涯芳草館主ときて吳濤ならば、すぐさま吳櫛という連想がわいてくる。

一応は疑ってみる。「櫛」と「濤」がいくら通音するといっても、同一人物だと断定していいのだろうか。ここは慎重に考える必要がある。吳濤と吳櫛は、同一人物かもしれない。しかし、別人である可能性も否定できない、くらいにしておこう。

通音するということであれば吳燾がいる。字は子明、雲南省保山県の人だ。在官30年と説明がある*11。この人は翻訳家の吳櫛には当てはまらない。

また、このほかに吳濤を名のる人物は3人いる。美術関係から2名だ。江蘇婁県(今の上海松江)の人、もうひとり延陵(今の江蘇丹陽の人)*12。さらに吳濤(1912-1983)という奉天盛京(今の遼寧瀋陽)の人(モンゴル族)もいる*13。しかし、原籍が違う。特に3人目など、生年からいっても私がここで問題にしている吳濤ではない。

吳櫛が、晝中のほかに丹初とも称していたことはすでに指摘がある*14。

ただし、呉が自分で丹初と署名して発表した作品に翻訳が含まれているかどうかは定かではない*15。少なくとも清末民初に時期を限定すれば、呉丹初名義の翻訳

作品そのものは見つからない。

呉禱と晝中の組み合わせならば、複数の実例があるから確かめることができる。たとえば、『小説月報』に掲載した押川春浪原作の漢訳3篇には、すべて「中華呉禱晝中」と明記してある。呉禱は呉晝中とも表記した。これを根拠にして「天涯芳草館主」を検討する。そのあとで呉濤にもどることにしよう。

呉禱と天涯芳草館主

周辺の資料を探すにあたって前出『潤例』を参照する。できるだけマイクロフィルムなどを見るようにつとめた。時間順に配置し便宜上番号を振る。

1900年3月28日付『中外日報』広告「天涯芳草館贈字」(『潤例』76頁)

冒頭に以下の文がかかげられている。

いたるところはイバラだらけで身の置き場所がない。日暮れて道遠く、壮士は面目もない。

この秃筆を持って私の本来をとりもどす。この世に同じ心の人はいはい、なにとぞ責められるな。

上の引用文は、呉禱が当時の心情を吐露したように読める。それだけのことだ。彼の経歴について具体的に説明するわけではない。それよりも、揮毫広告にはなにやらそぐわない雰囲気を発散しているような気がする。

文末に「天涯芳草館主呉禱啓」とある。つまり、天外芳草館主は呉禱だ、と明示している。天涯芳草館主と呉禱が結びついている証拠資料にはほかならない。この箇所が重要だ。

そのほかでわかることといえば、1900年に呉禱は上海に滞在、あるいは居住していた事実くらいか。制作依頼状は、中外日報館、大馬路一言堂、四馬路大吉楼、宝善街錦潤堂などにあてて出すように指示している。郵送までは考慮しない。つまり、呉禱は上海以外の地にあつて揮毫したものを郵送する、という可能性はないということだ。

この時期の呉禱は、天涯芳草館主と名のっている書家である。この広告文から、彼が翻訳家であることを推測することは無理だ。ほのめかず単語すらない。それもそのはずで、1900年当時、呉禱名義の翻訳作品は公表されてはいないからだ。

於念一日先向交易擇吉開張

天涯芳草館贈字

凡招地身無立雖日暮途窮壯士無色滿登禿筆選我本來世多同心幸毋見諂此啓
 來取件交中外先選詳細單請至以上各處取閱可也
 日取件交中外先選詳細單請至以上各處取閱可也

天涯芳草館主吳濤啓

『潤例』は、珍しい文献を丹念に収録して信頼がおけるように思う。特に『中外日報』の広告「天涯芳草館贈字」は、天涯芳草館主と吳濤を同時に提出している。どう見ても否定できるものではない。

さきに紹介した『同文滬報』の広告では天涯芳草館主吳濤だった。これが1900年5月7日付だ。それより以前の3月28日付『中外日報』広告では、天涯芳草館主吳濤だという。天涯芳草館主は共通しているが、濤と濤が異なる。時期によって、あるいは掲載紙によって表記が違うのだろうか。疑問が出てくる。

『潤例』にある引用を信用しないわけではない。だが、重要資料だから、自分の眼で確認したかった。

あらためて思う。やはり確認作業は必要だった。マイクロフィルムを見ると意外な事実が出てきたのだ。

『中外日報』の1900年3月28日付には、広告の「天涯芳草館贈字」は掲載されていない。これがひとつ。『潤例』76頁は、日付を誤植したらしい。示された該当の日に広告がない。当然、その前後を調べる。

時間をさかのぼると5日前に該広告が出ていた。3月23日付『中外日報』に広告「天涯芳草館贈字」は見える（左写真）。同じ広告が、25日、26日、27日と連続し、飛んで30日にも掲載される。4月1日にもある。すべて同じ文面だ。

広告の本文には、字句の間違いはない。単なる掲載日の誤りならば、まだよかった。だが、『潤例』76頁には、それよりも大きな誤植がある。広告を見れば、最後の署名は「天涯芳草館主吳濤啓」（傍点筆者）なのだ。「館」は「館」の異体字として同じにあつかってかまわない。しかし、肝心の「吳濤」が存在していない事実はどうなる。新聞広告にあるのは「吳濤」だ。私は、驚く。『潤例』76頁は、見間違っただのであろうか。その勘違いにもとづいて、天涯芳草館主は

言茂源酒樓

價每大瓶大洋三角美... 難得存貨無名... 購至四馬路中... 金漆為記... 庶不誤

上海春錫外國木器號新到

本號開設三弄... 色澤全另... 西式... 購辦外克已... 泰錫號告白

上海文明沼改良衛生益湯

本沼開設大馬路... 凡清潔異常... 且週內... 日開張... 貴紳商等... 隨時光降... 一試... 泰錫號告白

文明集賢茶樓特別廣告

四馬路大... 啓者本主人... 遊歷南洋... 見夫歐西... 各國衛生... 之法於香... 名一... 乃得遊歸... 國有萃於... 斯特爾... 本主人... 既於四月... 廿五日... 開張... 貴紳商等... 隨時光降... 一試... 泰錫號告白

天涯芳草館免資作書為江待

江待... 啓者本主人... 遊歷南洋... 見夫歐西... 各國衛生... 之法於香... 名一... 乃得遊歸... 國有萃於... 斯特爾... 本主人... 既於四月... 廿五日... 開張... 貴紳商等... 隨時光降... 一試... 泰錫號告白

上海中外興商勸業場廣告

本場為興商勸業... 凡一月... 外一月... 行分文... 概不取... 以振興... 商業... 惟一行... 一家... 不得有... 重限... 本月... 十日... 截止... 掛號... 此佈

文措司藥酒用特別新奇

體健精力倍加即有病者

1910年5月29日付『笑林報』

吳濤だ、といったところで説得力は減少する。

一方で、そうであれば、前述した書画公会の「吳濤」に直接つながる。

1900年5月7日付『同文滄報』廣告「創設書画公会報啓」(前出)

おさらいすれば、上海に創設された書画公会の社長が「西湖天涯芳草館主吳濤」である。それ以前の新聞広告には書家として西湖天涯芳草館主吳濤が存在していた。同一人物に違いない。

この「吳濤」が吳禱その人であるかどうかは別にしておく。天涯芳草館主に注目して書画公会という組織をとおして見れば、李叔同と吳濤は知人の間柄であった。

1910年5月29日付『笑林報』広告「天涯芳草館免資作為江侍卿留紀念」（『潤例』88頁）

江侍卿が民のために命乞いをして役人をやめた。故郷に帰る途中で上海を通過したので吳宣中は彼を歓迎する列に加わった。それを記念するための揮毫広告である。侍卿は官名を示す。江という人物、あるいはその事件については不詳。署名は「館主吳宣中謹啓」となっている。「館主」だから天涯芳草館主だ。吳宣中といえば、吳禱にほかならない。ここでようやく天涯芳草館主と吳禱が結びつく。

この広告は連名で掲載された。岑春煊、盛宣懐らの名前が見える。天涯芳草館主吳宣中についての紹介があって注目される。

海陽天涯芳草館主人吳君宣中は、著作が多くはやくから文芸界では有名である。かたわら書画金石についても精通しないものがない。書は幼いときから家学を継承し、古の賢人に親しみ、七八歳ではやくも腕を円滑に動かして大きな字を書くことができた。篆書隸書楷書草書ともにできないものはなく、諸名家を融合し万物を放棄して別に一家を立てた。（後略）

重要な箇所だからくりかえす。「海陽天涯芳草館主人吳君宣中」だ。天涯芳草館主人が吳宣中だということは、吳宣中を要にして同時に吳禱であることを意味する。吳濤、吳禱、吳宣中、天涯芳草館主が直接にむすびつく重要資料であると私は考える。以下は吳禱を使用する。

「著作が多くはやくから文芸界では有名である〔著作等身。早蜚声於文藝界〕」は、なにを意味しているのか。1910年といえば、吳禱の翻訳作品がすでに多数公表されている。資料の1900年における状況と異なるのが、この点だ。「著作が多く」とは、吳禱の翻訳作品を指して表現したと考えていいだろう。

王中秀ら『潤例』の「吳禱略歴」は次のように書いた。「清末の比較的早くにロシアの名著を紹介した作者であり」とは、この広告のこの箇所を彼らが独自に解釈

したものだろう。呉禱の翻訳といえば、ロシア作品をあげるのが定説になっている。その定説を略歴に取り入れたと思われる。

前述のように1912年と1913年、呉禱は張元済と面会して翻訳作品について相談した。当時、彼は上海に居住していた根拠となる。1910年から1912、13年に時間的に見て継続しているから不自然ではない。

1915年12月2日付『申報』広告「中国紅十字会佈告吳亶中君鬻字助賑」(X教授) 中国赤十字社が浙江江西への義捐金を急いで募集している。吳亶中に揮毫を依頼し、その利益の半分を援助するように乞うたところそれに応じてくれた。すなわち、義捐金を寄付するために揮毫をするという広告だ。

「天涯芳草館主吳君亶中」と表示がある。呉禱を紹介して「七八歳ではやくも...」と書く。資料と同じ語句を使用している。ほとんど伝説になっているといってもいい。あるいは、呉禱を宣伝する時の定型句なのかもしれない。こちらには、書以外の著作について説明することばがない。

1921年10月19日付『申報』広告「海内書家吳亶中篆隸真草潤例」(『潤例』103頁) ここでは、天涯芳草館主がはずれて吳亶中だけが出ている。「李経羲、莊蘊寛擬訂」と示してふたりの人物が登場する。代理人なのだろう。同文の後半では、偽物が多く出まわっている、と警告する。逆にいえば、偽物が作られるくらいに著名だということになる。

つぎの広告も同様だ。

1925年5月2日付『申報』広告「書法名家吳亶中先生篆隸真草書例」(『潤例』165頁)

冒頭で吳亶中を紹介する。すなわち、「君は才能は豊かで、風格は堂々としている。二十年上海に仮住まいをし、書の名声はひさしく内外に知れ渡っている」と。署名するのは4名だ。「李経羲 孫宝琦 章士釗 傅彊代啓」とある。李経羲らから見た呉禱ということになる。

前半は常套句であってそれほどの意味はない。後半がわずかな手がかりを与えてくれる。故郷の杭州を離れ20年にわたって上海に居住しているのであれば、単純に計算してさかのぼると1905年になるうか。呉禱の名前が見える新聞広告は、今のところ1900年のものが早い。こちらを起点にすれば25年を数える。厳密に計算しているわけではなく、李経羲らとの交流が20年間つづいているという意味かもしれない。

1925年の新聞広告に揮毫料金表を公表している事実を別の角度から見る。別にむつかしいことを書こうとしているのではない。1925年に呉禱は上海に住んでいると考えてよいというだけだ。

資料 の1915年から呉禱の著書、すなわち翻訳作品について触れない。それには理由があると思う。

天涯芳草館

呉禱は、天涯芳草館主とも称していた。以上の資料を見れば、ほぼ間違いなさそう。

では、その室名を使った翻訳作品があるのだろうか。書については天涯芳草館主を使用し、翻訳作品にはそれを使用しない。そのように筆名を使い分けているのではないか、という意味である。

探すといくつかの作品が見つかった。といっても、調べる過程で試行錯誤せざるをえない。

ひとつは詞だ。手がかりはふたりの研究者によって提供されていた。

前出の郭長海論文に言及がある。といっても著書の『李叔同集』ではなく論文「李叔同和上海《書画公会報》」の方だ。

李叔同は、日本留学中に『音楽小雑誌』（創刊号のみ）を刊行した。李は、それに歌曲「天涯蓬梗図」1首を發表しているという（766頁）。郭長海の説明によれば、李叔同は、それを西湖天涯芳草館主呉禱のために書いた。この呉禱とは、（郭長海は触れていないが）いうまでもなく呉禱その人である。李叔同と呉禱のふたりは、ともに書画公会を設立した仲間だ。李が呉の室名を織り込んだ詞を書いているのも不思議ではない。

もうひとつは、秦啓明「弘一大師述系年」（『弘一大師李叔同書信集』。449頁）にある。秦も李叔同の作品に「天涯曲 題天涯萍梗図」があると説明している。それには、「1906年2月作於東京神田区集賢館」と添えられる。詳しいではないか。その住所を見れば日本で作ったものだとわかる。だから『音楽小雑誌』に掲載されているのだろう、と私は考えた。

郭長海と秦啓明がそれぞれ示す題名は異なるにしても、李叔同の作品として掲げていることが明らかだ。李が呉のために書いたというのであれば、呉禱について知ることができるかもしれない。

音響小雜誌第一期
二十四

吹簫無人燕市寒沽酒則見那壁兩對狼爭食英雄肉遺孽兩草先埋烈士頭
投何留吳頭楚尾風引起老漁謳
〔馬蹄花〕國恨鄉愁正搖落雁來時候又夕陽殘照雨孤寒雨孤寒消受清秋你細細
敢點破帝鄉臺碎酒旗不響乾坤漏任你長懷恨空歌斷吳鉤
〔尾聲〕趁江鄉風月留人久且和你鐵笛攜吹最上頭珍重這無恙江山到處離亭
酒

兩舞綠綫去重裘著棉夏不遠矣去年著秋衣亦無幾日感歎書之
肯 堂

三月嚴寒四月熱九月炎風十月雪年來但覺春秋種寒暑之間一飄瞥世間萬物
要平進四序分明不中絕問天何故宣淫威任把陰陽自起滅可憐天翁尚不知每
逐玉母張璠池池亦有好風月六合雲烟方散野南斗生人北斗死東帝西帝貴
無爲儒仙之體不敢談維是有覺仍聽隨安得倚天一長劍誅殺風伯刑雨師
國聲圖 日本成島柳北

天涯曲 題天涯萍梗圖 西湖天涯芳草館主人

〔北點絳脣〕不是登樓非關出岫望長安雲樹悠悠道其間便消得行人瘦
〔金蕉葉〕世事沈浮任變幻白雲蒼狗陡心驚半壁東流甚來由投得風塵倦
〔梁州序〕論男兒大好封侯是關豈甘落後只恐天公有意賺英雄人散儘有將
兵韓信和我魏絳算不得問天手冤冤神州可能雲淨天街宿露收
〔解〕二醒那裏是營連細柳那裏是艦檣高樓那裏是甲兵十萬胸中構那裏是
鞭撻那裏是秦關百二嚴壁那裏是楚客三千擁雪矛山河舊記取那前程在
望四馬輕舟
〔二犯梧桐樹〕看燕天社鼠避距地城狐守待渡無人斜日黃昏候不成我與會去

市

二二三

『音楽小雑誌』第1期 原本は京都大学所蔵

それらとは別に、『音楽小雑誌』を紹介する西槇偉の論文がある。それには「西湖天涯芳草館主人の詞七首」と言及されている*16。

郭長海および秦啓明の記述とあわせて考えてみる。総合すると、『音楽小雑誌』に呉櫛と李叔同のふたりが作品を掲載しているようなのだ。ただし、題名についてふたりの説明は微妙に異なっている。解説する人が把握する資料の確かさに起因するものだろう。そうすると、実物を見なければ疑問は解決しない。

その部分の複写を入手してみればはじめてわかった。李叔同の作品ではなかったのだ。郭長海も秦啓明も『音楽小雑誌』を見ないで書いたらしい。それにしても、秦啓明の記述は詳しかった。東京神田の住所まで書いてある。何かを見なければでてこないだろう。私はてっきり該誌を手に入れていると思ったのだ。

『音楽小雑誌』の最後に「詞府」という欄が設けてある。そこに日本人を含めて4人の作品が収録されているが、李叔同(息霜)の名前はない。見れば冒頭に掲載されているものが私の探している作品だった。西槇偉は実物を見て紹介しているから、それが正しい。

西湖天涯芳草館主人、すなわち呉櫛の「天涯曲 題天涯萍梗図」である*17。

どういういきさつで書かれたのか。その発表の詳細については、不明としなければならぬ。呉櫛と李叔同の人的つながりによったと推測できるのみ。雑誌『音楽

小雑誌』(全26頁。26頁は空白)は、李叔同がひとりで編集した。呉禱「天涯曲 題天涯萍梗図」は、それに掲載する価値があると李叔同によって判断されたということだ。

ほかに小説がいくつかある。

(法) 雷科著、天涯芳草訳「(裁判小説)博浪椎」10章 『競立社小説月報』第1-2期 光緒三十三年九月二十八日 - 十月二十四日(1907.11.3-11.29)

天涯芳草「(札記小説)開国会」 『競立社小説月報』第2期 光緒三十三年十月二十四日(1907.11.29)

(徳) 摩哈孫著、芳草館主人訳 『虚無党真相』2冊 広智書局 光緒三十三年十一月(未見)*¹⁸

前2作品は、天涯芳草だけで「館」はついていない。天涯と芳草の組み合わせは、ほかに見ることができないから呉禱の作品だと考えていい。

後者の『虚無党真相』に関して補足する。『小説林』第10期(1908年三月)の新書紹介では「天涯芳草館主人訳」となっている。天涯芳草館に主人がついて呉禱を示している。

書名を見れば虚無党文学のひとつらしい。こちらは実物未見だから想像するしかない。呉禱の翻訳ならば日本語の原本があるだろう。一応、柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』(明治文学研究第5巻 春秋社1961.9.15 / 1966.3.10二刷)の虚無党文学関連部分を見てみた。探し方が悪いらしく、それらしい作品はみつからなかった。

『虚無党真相』の訳者は、芳草館主人とだけ表示されている。つまり、以前は呉禱の翻訳であるとは知られていなかったのだ。それにもかかわらず、賈植芳、俞元桂主編『中国現代文学総書目』(福州・福建教育出版社1993.12.904頁)には、「該書は日本語にもとづいた重訳」と注釈が加えてある。該書の前言かどこかにそう説明されているのかもしれない。日本語からの重訳ならば、呉禱の作品であっても不思議ではないと思う。奇妙に一致するのである。

また、新聞に連載された短編小説がある。

(美) 濮倫孫記、天涯芳草館主宣中訳「(冒険短篇小説)二十六点鐘之大飛行」 『申報』1910.1.27-29

ブロンソン（音訳）は、アメリカの新聞記者だ。「美国阿美利加梅軋丁報記者」と肩書きがつけられているところからそれがわかる。小説と表示しているが、内容は気球旅行を報じる新聞記事のようだ。日本語が原文かもしれない。

訳者が、天涯芳草館主亶中となっているところに注目する。

くりかえす。本稿が根拠とするのは、呉禱が亶中と一緒に使用されている事実である。その亶中が、天涯芳草館と結びついている。ならば、天涯芳草館は呉禱の室名に違いない。天涯芳草館主は、呉禱のいわば雅号、筆名である、とあらためて確認する。天涯芳草、天涯芳草館主人、あるいは天涯芳草館主を使った作品が存在していることも新しく判明した。

小説ではなさそうだが、翻訳で呉禱名を使用している2点の書籍をあげておく。

（日）坂口瑛次郎撰、（清）呉禱訳『支那帝国主人第一人成吉思汗少年史』上海人演訳社 光緒29年（1903）*19

（日）松村介石著、呉禱訳『社会改良家列伝』出版年月不詳*20

上記漢訳2点ともに未見。後者の『社会改良家列伝』は、「通社叢書」に収録された1冊だ。同叢書のほかの出版物が1903年発行だからこれも同年の刊行かと考えられる。原本は、松村介石『社会改良家列伝』（東京・警醒社書店1897.3.15）に違いない。架蔵のものを見ると「ウイリヤム、ラングランド」ほか全7名の伝記だ。「アブラハム倫古龍」つまり目次には「アブラハム、リンコルン」とあるアメリカ大統領も含んでいる。

新しくわかった呉禱の翻訳は、1903年の出版だ。そうすると、雑誌『繡像小説』に掲載した小説作品の翻訳、あるいは商務印書館刊行の単行本よりも時期的には先んじている。

蔣維喬が説明したことを思い出す。愛国学社での仕事は無給だったから、各人は別に生活の方法を持っていた。示されたのが翻訳だった。1902年時点で呉禱が上記の2点を翻訳していれば、それからの収入があったと考えてもいいだろう。蔣維喬の文章の流れがあったから、呉禱にも翻訳を当ててみた。

だが、書家としての呉禱という今までは知られていなかった状況が新しく出現した。ならば、書家としての活動で生活基盤は安定していたと考える方が自然だと思

いいたるのだ。そうであればなんの矛盾もない。

呉禱晩年の住所

呉禱が長らく上海に居住していたことは、すでに見た。

王中秀らの『潤例』には、「附録三 書画家寓址摭拾」(390頁)がある。それには書画家の住所が集めてあって呉亶中の名前が2箇所に見える。

1920年書画家寓址(上海商業名録1920年)

呉亶中(書) 江西路31号華安合群保寿公司

1926年書画家寓址(上海快覽1926年10月三版)

書家/呉亶中 漢口路西畫錦里412号

資料 から まで、新聞広告を示した。それらはいずれも上海で発行されていたものだ。それらとあわせて上の住所を見る。呉禱亶中は、1926年まで上海に暮らしていたと推測できる。

結 論

呉禱の名前に関してその表示を時間の順序に並べてみる。

1900 天涯芳草館主呉禱

1900 西湖天涯芳草館主呉禱

1903 呉禱

1905-08 呉禱

1906 西湖天涯芳草館主人

1907 天涯芳草

1907 芳草館主人

1910 天涯芳草館主亶中

1910 館主呉亶中、海陽天涯芳草館主人呉君亶中

1913 呉禱亶中

1915 呉亶中、天涯芳草館主呉君亶中

1921 呉亶中

1925 吳宣中

判断の根拠は、「吳禱宣中」に依っている。吳宣中が天涯芳草館主だから、吳宣中は吳禱にむすびつく。吳宣中は吳禱だから、必然的に吳禱でもある。結局のところ関連をたどれば、天涯芳草館主は吳禱になる。

上の実例を見る限り、天涯芳草館主と吳禱が同時に出現するものはなさそうだ。これに関しては、今後も調査を続行する。

以上をまとめて、吳禱が翻訳した作品の公表状況を追跡すると、ひとつの事実が見えてくる。

現在まで判明している彼の翻訳作品は、最初が1903年の『支那帝国主人第一人成吉思汗少年史』だ。

翻訳小説ならば、(徳)蘇徳蒙原著(登張竹風原訳 吳禱重訳)「(軍事小説)賣国奴」16回になる。ズーダーマン著、登張竹風訳『賣国奴』(金港堂書籍株式会社1904.9.15)にもとづいた重訳である。『繡像小説』第31-48期に連載された。該雑誌の当該号には発行年月日の記載がない。刊行が遅延していたから、実際の公開は1905年だと私は見ている。

すなわち、吳禱の翻訳活動は、1903年から始まった。その後、多くの翻訳作品を発表しつづける。ところが、1913年の『小説月報』に「(冒険小説)侠女郎」を3回連載したのを最後に翻訳作品は発表していない。翻訳界から吳禱の名前は消失する。

吳が翻訳家として活動したのは、1903年から1913年までの約10年間にすぎない。

吳禱が日本に留学した可能性があるとするれば、1904年頃ではないかと推測した。しかし、1903年にはすでに日本語にもとづく翻訳作品を出版している。この時間差をどう考えればいいのか。

ひとつの解釈は、こうだ。吳禱は日本留学を経験しなかった。

日本語の習得といっても、やり方はひとつに限定されない。発音する必要はなく読解できればいいと割り切る考え方もある。そのばあいは、必ずしも留学する必要はない。

私が例として知っているのは包天笑だ。包は、蘇州において日本の本願寺和尚藤田某から日本語を学んだ。日本語の文法を知れば日本の書籍は見ても理解できるというのが包天笑の考えだった。3ヵ月あまりで文法をどうにか修得したという。日本

の書物には漢字が比較的多いので包も見て理解できるようになったのだ。包天笑が好んだ森田思軒、黒岩涙香の翻訳ものは、日本に留学している友人に古本屋でさがしてもらった。入手できないものは友人が図書館で借りてそのまま返却しなかったこともあったという*21。

呉禱も同じやりかたではなかったか。上海で日本語を学び、日本語文献を読みこなす能力を身につけた*22。日本の雑誌書籍は、呉禱の知人（日本在住）から送ってもらえばよい。李叔同が日本に留学していた。だが、そこまでしなくても、当時の上海にはすでに日本の書店があって営業している。包天笑はそう書いているのだ。

例をあげよう。1903年、日本の金港堂と合併した商務印書館は、社会に向けては金港堂の代理店だと広告した。合併会社になった大きな事実を隠蔽したかったからそういう宣伝になった。小さい事実を正面に出したとわかる。たしかに代理店の要素も備えていた。ならば、呉禱のばあいも、必要な書籍は商務印書館に注文すれば日本から取り寄せてくれる。別に問題は生じない。

新聞広告によれば、呉禱が書家として活躍したのは、翻訳家に比較してかなり長期間にわたる。1900年にはすでに一家をなしていた（資料）。1926年には書家のひとりにあげられている。その時の住所も上海にあった。呉禱の書家としての経歴は、少なくとも約26年をかぞえる。翻訳家として活躍していた時期にくらべれば、単純に数えて2.6倍になる。たまたま1900年の新聞広告が目についただけで、それ以前から書家であった可能性の方が大きい。

今まで、呉禱といえば翻訳家の側面だけに光が当たっていた。中国翻訳文学の研究分野ではそうだ。その彼が、書家として著名であったとは、正直に言って私は想像もしなかった。中国翻訳文学界に限定して呉禱の足跡を追究してきたのだからしかたがない。別の場所に手がかりがあるとは思わなかったのだ。

視界がひらけてみると、新しい呉禱が姿をあらわす。彼は書家の活動が長かったとわかる。教育関係の団体にも身を置いていた。それに加えて翻訳にも力を注いで著名だ。

名前の使用例を見る。翻訳のばあいは主として呉禱名を使用していた。呉禱宣中という組み合わせもある。一方、書においては、天涯芳草館主（翻訳でも使用）、呉濤、呉宣中を使うことが多かった。

呉禱は、多様な才能に恵まれた人だったということができる。

最後にちいさな疑問を提出して終る。書家として長い経歴をもつ呉濤（呉禱）で

あるのならば、書の世界での彼の詳細がなぜ伝わっていないのか。ただし、これも私が知らないだけかもしれない。



【注】

- 1) 中村忠行「吳禱訳『売国奴』その他」『中国文芸研究会会報』第24号1980.7.28。吳禱訳『賣国奴』は「どう見ても華訳の方が竹風訳より早く出版されているのだ」3頁。樽本「吳禱の別名」『清末小説から』第10号1988.7.1。「研究結石」『清末小説研究論』所収。別名に丹初があることを指摘した。
- 2) 阿英「翻訳史話」の執筆は1937年だと文末に書いてある。ただし、公表されるまでに時間がかかった。ほとんど半世紀後のことだ。『小説四談』（上海古籍出版社1981.12）に収録されたので私は知った。念のため錢厚祥編「阿英散篇文章目録」（『阿英全集』附卷 合肥・安徽教育出版社2006.5）を見た。その1937年には該文の記載がない。
- 3) いくつかの例を以下に示す。

陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』杭州・浙江古籍出版社1993.5。366頁 / 『中国近現代人物名号大辞典（全編増訂本）』杭州・浙江古籍出版社2005.1。496頁

任 栄珍「吳禱」林煌天主編『中国翻訳詞典』武漢・湖北教育出版社1997.11。734頁

郭 延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3。375-376頁 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷。299-300頁

「六 吳禱的俄羅斯文学翻訳」「第5章 外国文学的訳介及其流播」『近代西学与中国文学』南昌・百花洲文藝出版社2000.4

「俄羅斯文学的早期訳者吳禱」『自西徂東：先哲的文化之旅』長沙・湖南人民出版社2001.4

「第三節 吳禱、戢翼翬、陳嘏与俄羅斯文学翻訳」羅選民主編『外国文学翻訳在中国』合肥・安徽文藝出版社2003.12。『中国近代翻訳文学概論』から引用

「俄羅斯文学三大名家の早期訳者吳禱」『文学經典的翻訳与解読 西方先哲的文化之旅』濟南・山東教育出版社2007.9。「俄羅斯文学的早

期訳者吳禱」と同文

查明建、謝天振『中国20世紀外国文学翻訳史』上巻 武漢・湖北教育出版社

2007.2。86-87頁

- 4) 書評が書かれている。松村茂樹「書評 王中秀 茅子良 陳輝編著『近現代金石書画家潤例』」、『中国近現代文化研究』第8号2005.12.25
- 5) 松村茂樹『吳昌碩研究』研文出版2009.2.27
- 6) 日本留学時代の李叔同について詳述する陸偉榮『中国の近代美術と日本 20世紀日中関係の一面』(大学教育出版2007.10.26)がある。労作だから掲げた。書画公会に言及しているという意味ではない。書評が書かれている。松村茂樹「中国近代美術の真実」、『東方』2008年3月号2008.3.5
- 7) 袁希濂の名前が次の論文に見える。田中比呂志「清末民初における地域エリートと社会管理の進展 江蘇省宝山区地域社会を例として」、『東京学芸大学紀要』人文社会科学系 58 2007.1電字版
- 8) こまかく検討してみる。『書画公会報』の発行は、水曜日と日曜日だと郭長海は書いている。第1期の旧暦四月二十二日は、1901年ならば土曜日だ。1900年がまさしく日曜日に当る。曜日からいっても1901年にするのは誤り。
- 9) 中国の研究者は、花榜をまるであつてはならないもののように考えている。私がなぜそのようなことを書くか。李伯元が自ら経営する『遊戯報』で開催したのが、いわゆる花榜であった。有名なことだ。だが、中国の研究界では、古い時代の批判されるべき催し物という位置づけになっている。美女コンテストなどとてもない、という感覚だ。李伯元研究においては、批判される材料に利用される。しかし、その実態を積極的に説明する文章はほとんど、ない。樽本は第1次資料というべき小冊子『庚子蕊宮花選』の実物を発掘した。しかし、一部を除いてみな無視した。だからこそ、それとは別に、李叔同に関連して同様の花榜に言及しているのが珍しいと感じる。
- 10) 「書画公会報目録」という題目で新聞広告が掲載されている例などを示す。郭長海が「李叔同和上海《書画公会報》」で紹介する新聞広告には*をつける。
* 『中外日報』1900.4.27付(未確認。マイクロフィルムでは欠)
『同文滬報』1900.5.7付 / 「創設書画公会報啓」
『同文滬報』1900.5.29付 / 五月初三日『書画公会報』第4期
『同文滬報』1900.6.4付 / 五月初七日『書画公会報』第5期

- 『同文消閑報』1900.6.10付 / 『書画公会報』第7期
- 『采風報』1900.6.21付 / 五月二十四日 『書画公会報』第10期
- * 『中外日報』1900.9.5付
- * 『中外日報』1900.9.24付
- * 『中外日報』1900.9.28付
- * 『中外日報』1900.10.1付
- * 『中外日報』1900.10.7付 (未確認。マイクロフィルムでは欠)
- 『遊戯報』1900.10.17付
- 「本館花榜展期至重九日揭曉荐函限至九月朔截止此佈」 / 閏八月廿一日
- 『書画公会報』第36期
- 『遊戯報』1900.10.23付
- 「本館花榜展期至重九日揭曉荐函限至九月朔截止此佈」 / 閏八月廿八日
- 『書画公会報』第37期
- 『遊戯報』1900.10.31付
- 「本館花榜因館主赴蘇未歸俟提起再為登報」 / 『書画公会報』第38期
- * 『中外日報』1900.10.31付
- * 『中外日報』1900.11.13付
- 11) 北京・支那研究会編 『最新支那官紳録』日本・富山房発売1918.8.20初版未見 / 1919.9.10三版。132頁。陳玉堂編著 『中国近現代人物名号大辞典 (全編増訂本)』496頁
- 12) 俞劍華編 『中国美術家人名辞典 (修訂本)』上海人民美術出版社1981.12 / 1990.10第四次印刷。316頁
- 13) 『中国人名大詞典・当代人物卷』上海辞書出版社1992.12。855頁
- 14) 『同文滬報』光緒三十三年七月十六日 (明治40 < 1907 > 年8月24日)。また、『張元濟日記』上冊 (北京商務印書館1981.9) の1912年と1913年部分。
- 15) 陳玉堂編著 『中国近現代人物名号大辞典 (全編増訂本)』469頁に「又名丹初 (署見1925《民国日報・覚悟》, 疑是)」とあるが未確認。
- 16) 西槇偉「中国新文化運動の源流 李叔同の『音楽小雑誌』と明治日本」『比較文学』第38巻1996.3.31。70頁
- 17) 『音楽小雑誌』第1期 陰曆丙午正月二十日 (1906.2.13) 発行。編輯人李叔同、管理兼発行人尤惜陰、出版部広益社、販売所開明書店、印刷人白土幸力。公益

社の住所は上海だが、印刷所は日本の三光堂だ。李叔同の住所が、日本東京市神田区今川小路二丁目三番地集賢館となっている。

- 18) 中村忠行「晚清に於ける虚無党小説」『天理大学学報』第85輯1973.3.21。144頁に言及がある。ただし「原作未詳」。
- 19) 実藤恵秀監修、譚汝謙主編、小川博編輯『中国訳日本書綜合目録』(香港・中文大学出版社1980。531頁)には『成吉思汗少年史』で収録される。ただし、細部が異なる。坂口^{マツコ}横次郎著、呉禱訳。上海・人演社〔1911年前後〕
- 20) 柳和城、劉承「上海通社与《通社叢書》」『出版史料』2009年第1期(新総第29期)2009.3.25。116頁
- 21) 包天笑『釧影楼回憶録』香港・大華出版社1971.6。158頁。174頁
- 22) 日本に留学したのであれば、どこかに痕跡が残っているだろう。そう考えて房兆楹輯『清末民初洋学学生題名録初輯』(台湾・中央研究院近代研究所1962.4)をくり返し見た。呉禱に該当するような人物を探し当てることができない。また、浙江省出身の留学生を主題とした呂順長『清末浙江与日本』(上海古籍出版社2001.8)、「清末における浙江省留日学生の帰国後の活躍 浙江各学堂の学校教育を中心に」(大野浩秋、孫安石編『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房2002.5.31)も同様であった。

(さわもと きょうこ)